

# 『茶会集』の評釈(三) —寛文年間の柳営茶会—

石井 智恵美\*

An Annotation of “Chakaishu” (Ⅲ):

Ryuei Chakai, Chanoyu Held by Tokugawa Shogun Ietsuna, during  
Kan' bun Period

Chiemi ISHII

**抄録** 名古屋市蓬左文庫所蔵の茶会記『茶会集』を前報告に引き続き評釈する。今回は徳川四代将軍家綱が寛文六年と十年に江戸城中において催した六回の茶会を検討した。これは、前報告の『茶会集』の評釈(一) —寛文年間の御成の茶会—で示した表1『茶会集に記録される茶会』の茶会4から9までが対象である。『徳川実紀』によれば、諸大名においては、藩主の代替りの際に家督相続を許されたことを謝して先代愛用の品々を将軍に献上するという記述がたびたび見られる。特に家綱政権の頃にはこのような道具類の献上が幕府主導のもとに行われていたようである。今回検討した内容には家綱がそれらの道具類を用いて茶会を開く様子を垣間見ることができる。

キーワード 茶会 家綱 柳営 茶の湯 寛文

はじめに

『茶会集』は名古屋市蓬左文庫に所蔵される茶会記である。<sup>1,2</sup> 前報告でも述べたが、その内容の多くは大名家の茶会の記録であり、尾張徳川家の記録に限定されているわけではない。今回は<sup>1</sup>前報告に掲載した表1『茶会集』に記録される茶会』の中から茶会4〜9について評釈する。これらの茶会は寛文六年と十年に四代将軍徳川家綱が江戸城内に於いて催したものである。

寛文年間(四代将軍徳川家綱(一六四一〜八〇)の御代である。家綱は三代将軍家光の長子であり寛永十八年(一六四一)八月三日

に生まれる。生母は増山氏おらくの方。幼名は竹千代。正保元年(一六四四)十一月、家綱と名のる。この時四歳。その後、慶安四年(一六五二)四月二十日、父家光が罷かったことにより将軍となる。この時十一歳。将軍在位は一六五一〜八〇年までの三十年間。延宝八年(一六八〇)五月八日死去。薨年四〇歳。法号は嚴有院。

家綱が将軍となったのは十一歳でまだ幼く、父家光との茶の湯の交流も<sup>3</sup>『徳川実紀』に見いだせない。<sup>4</sup> 池ノ谷匡祐氏は「数寄屋御成り

\* いしい ちえみ 文教大学教育学部学校教育課程家庭専修

の展開と衰退」の中で、家綱が生涯に六回他家への御成をしていること、そのうち五回は「一歳から八歳までの間に若宮として行われたもので、家綱の意向が反映されていたとは考え難い」ことを指摘している。その通りと思われる。最後の御成は明暦二年（一六五六）五月二十六日で、『厳有院殿御実紀』には「（酒井）忠勝が牛込の別墅にならせ給ふ」と記されている。この時、家綱は一六歳である。しかし、これら六回の御成は何れも数寄の御成ではない。家綱が催した最初の茶会とされる茶の湯の記録は最後の御成から十日程後、『厳有院殿御実紀』の明暦二年六月六日条に、

酒井讃岐守忠勝まうのほり。昨日忠直謝恩の拝謁せしを謝し奉る。致仕後始めて出仕せしにて御盃たまひ。お手づから茶を下さる。

と記述されている。この時の茶の湯の詳細はわからない。しかしながら、この時までに家綱の茶の湯に関する記録は見当たらないにもかかわらず、この日、家綱は茶の手前をしている。つまり、『厳有院殿御実紀』あるいは『殿中日記』が幕府の公的な記録であるとしても、家綱の茶の湯の練習などの記載が全くないまま茶会を開き、且つ茶の手前をしているということから、武家において茶の湯は嗜みということがよく分かる記録である。

家綱はこの明暦二年六月六日の茶湯を始まりとして生涯に三〇回の茶湯に関する記録がある。今回評釈する『茶会集』の記録からはそのうちの六回分の家綱の茶会が見いだせる。<sup>6</sup> 武田庸二郎氏は「徳川家綱の茶湯について―身分制社会における饗応と贈答―」の中で、

藩主の隠居もしくは死去に伴う代替りの際、家督相続を許され、「家」の存続が認められた見返りとして、先代愛用の品を将軍に

献上することは、家綱政権期当時、一種の武家習慣となっていた。この習慣は享保七年（一七二二）に、「隠居并遺物御道具類献上相止候事」という法令が發布されるまで続いた。

と説明しており、家綱が将軍となった慶安四年から亡くなる延宝八年までの三〇年間で茶道具一七三点の献上があったことも一覧表にして示している。献上品に何が適切であるかは、あらかじめ幕府から内々に伝達があったとされるが、そのような献上が家綱の意向であったかどうかを判断することは難しい。しかし、本報告で評釈する茶会はそのように集められた道具類のお披露目という目的を持ったと思われる会も認められる。

#### 凡例

- 一、本書は名古屋市蓬左文庫の架蔵にかかるものである。
- 一、翻刻にあたっては、原文の体裁を残すことを原則としたが、現在不使用の古体字・異体字は■で残し、その下に□括弧で現在の文字を入れた。
- 一、『角川茶道大事典』は本文中で『角川茶道』と略した。
- 一、『新版茶道大辞典』は本文中で『新版茶道』と略した。
- 一、『日本国語大辞典第二版』は本文中で『日国Ⅱ』と略した。
- 一、本書の翻刻・掲載の御許可を賜った名古屋市蓬左文庫に厚く深謝いたします。

表紙 乾  
表紙 坤

(茶会4)

一 御老中不殘御座之間御料理之間  
おゐく御相伴<sup>ニ</sup>御料理被下御囲  
にて御茶被下

御懸物  
御茶入  
御茶碗  
御茶杓  
水指  
御花入  
御香合  
御釜

定家七首  
繁雪肩衝<sup>(2)</sup>  
三しま<sup>(3)</sup>  
利休<sup>(1)</sup>  
信楽焼<sup>(5)</sup>  
青磁碁<sup>(6)</sup>  
青貝<sup>(7)</sup>  
筋<sup>(8)</sup>

寛文六年午十二月十六日

老中全員が御座の間でのお料理のあいだ、順々にお相伴されてお料理が出され、御囲いにてお茶を頂いた。掛物は定家七首。茶入は繁雪肩衝。茶碗は三島。茶杓は利休作。水指は信楽焼。花入れは青磁の砧。香合は螺鈿。釜は筋釜である。

（茶会5）

寛文十戌十一月十五日  
一 甲府様 館林様新御囲に露次より被為  
入御料理出御手前 御茶被進

|     |      |
|-----|------|
| 山登  | 桐    |
| 山掛物 | 虚堂   |
| 山茶入 | 筑紫   |
| 山茶碗 | 三嶋   |
| 山茶杓 | 利休   |
| 山水指 | 繩簾   |
| 山花入 | 燕なし  |
| 山茶合 | 堆朱布袋 |

山次 山床に八景御掛物牧溪筆  
その外御飾物有之

（茶会5）

寛文十戌十一月十五日<sup>⑨</sup>  
一 甲府様 館林様新御囲<sup>江</sup>御露次より被為  
入御料理出御手前<sup>三</sup> 御茶被進

|     |                   |
|-----|-------------------|
| 御釜  | 桐 <sup>⑩</sup>    |
| 御懸物 | 虚堂                |
| 御茶入 | 筑紫 <sup>⑪</sup>   |
| 御茶碗 | 三嶋                |
| 御茶杓 | 利休                |
| 御水指 | 繩簾 <sup>⑫</sup>   |
| 御花入 | 燕なし               |
| 御香合 | 堆朱布袋 <sup>⑬</sup> |

御次之御床二八景御掛物牧溪筆  
其外御飾物有之

（現代語訳）

寛文十年戌十一月十五日

甲府様と館林様が新しい御囲に露地より入られ、お料理が出され、  
（將軍の）手前にてお茶を頂いた。釜は桐。掛物は虚堂の墨蹟。茶入  
は筑紫。茶碗は三嶋。茶杓は利休作。水指は繩簾<sup>なわすだれ</sup>。花入は燕なし。香  
合は堆朱の布袋である。次の間の床には牧溪筆の瀟湘八景図が掛けら  
れ、その他にも道具類が飾られている。

(茶会6)

同年九月朔日  
一水戸様御晦於御囲御手前<sup>二</sup>御茶被下也

|     |                      |
|-----|----------------------|
| 御懸物 | 卯月 <sup>17</sup>     |
| 御茶入 | 朱衣 <sup>18</sup>     |
| 御茶碗 | 三島                   |
| 御茶杓 | 利休                   |
| 御釜  | 大あられ <sup>19</sup>   |
| 御水指 | 法楽 <sup>20</sup>     |
| 御花入 | 大そろり飛龍 <sup>21</sup> |
| 御香合 | 青貝 <sup>22</sup> くり  |
| 三ッ羽 | 大鳥 <sup>23</sup>     |

(茶会6)

同年九月朔日<sup>15</sup>

一 水戸様御晦於御囲御手前<sup>二</sup>御茶被下也

|     |                      |
|-----|----------------------|
| 御懸物 | 卯月 <sup>17</sup>     |
| 御茶入 | 朱衣 <sup>18</sup>     |
| 御茶碗 | 三島                   |
| 御茶杓 | 利休                   |
| 御釜  | 大あられ <sup>19</sup>   |
| 御水指 | 法楽 <sup>20</sup>     |
| 御花入 | 大そろり飛龍 <sup>21</sup> |
| 御香合 | 青貝 <sup>22</sup> くり  |
| 三ッ羽 | 大鳥 <sup>23</sup>     |

(現代語訳)

寛文十年九月朔日

一 水戸様が御晦の節として御囲において(将軍の)手前にてお茶を頂いた。掛物は卯月の里、茶入れは朱の衣、茶碗は三島、茶杓は利休作、釜は大霰、水指は法楽、花入は大そろりで飛龍の文様がある。香合は螺鈿のぐり。羽箒は鶴の三ッ羽である。



（茶会7）

同二月廿五日  
 一 紀州様御晦之節御手前<sup>二</sup>而御茶被進  
 御懸物 圓悟<sup>(25)</sup> 蜂須賀阿波守  
 御釜 桐<sup>(26)</sup> 竹中<sup>(26)</sup>  
 御水指 法樂新<sup>(27)</sup>  
 御茶入 大隅肩衝<sup>(28)</sup> 井伊掃部頭  
 袋烏たすき純子<sup>(29)</sup>  
 御茶碗 高麗三島 土井大炊頭  
 御茶杓 利休 雅楽頭  
 御花入 大そろり 土井大炊頭  
 御花連翹赤キ八重椿  
 御香合 青螺肩形<sup>(30)</sup>  
 一 紀州様が御晦の節として（將軍の）手前にてお茶を頂いた。  
 掛物は蜂須賀阿波守綱通より献上の圓悟の墨蹟。釜は桐で自在鉤は中  
 ぶりの竹製である。水差しは法樂（焙烙）で新しく焼いたもの。茶入  
 れは井伊掃部頭直澄より献上の大隅肩衝。袋は烏たすき模様の緞子で  
 ある。茶碗は土井大炊頭利重より献上の三島高麗。茶杓は利休作で酒  
 井雅楽頭忠清が献上したものである。花入は土井大炊頭利重が献上し  
 た大そろりである。花は連翹と赤い八重の椿。香合は肩形の螺鈿であ  
 る。

（現代語訳）

寛文十年二月廿五日

（茶会7）

同年二月廿五日<sup>(24)</sup>

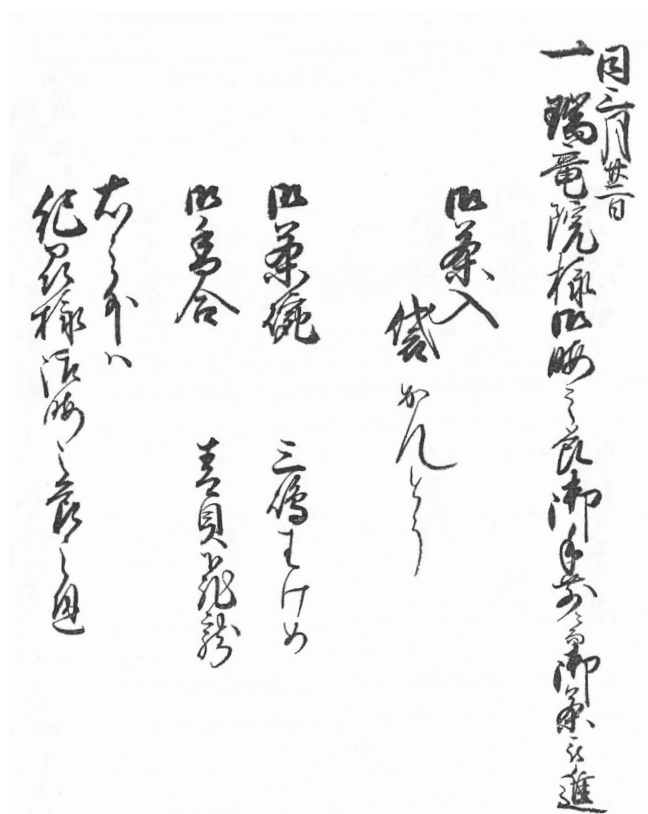
一 紀州様御晦之節御手前<sup>二</sup>而御茶被進

御懸物 圓悟<sup>(25)</sup> 蜂須賀阿波守  
 御釜 桐<sup>(26)</sup> 竹中<sup>(26)</sup>  
 御水指 法樂新<sup>(27)</sup>  
 御茶入 大隅肩衝<sup>(28)</sup> 井伊掃部頭  
 袋烏たすき純子<sup>(29)</sup>  
 御茶碗 高麗三島 土井大炊頭  
 御茶杓 利休 雅楽頭  
 御花入 大そろり 土井大炊頭  
 御花連翹赤キ八重椿  
 御香合 青螺肩形<sup>(30)</sup>

一 紀州様が御晦の節として（將軍の）手前にてお茶を頂いた。

掛物は蜂須賀阿波守綱通より献上の圓悟の墨蹟。釜は桐で自在鉤は中  
 ぶりの竹製である。水差しは法樂（焙烙）で新しく焼いたもの。茶入  
 れは井伊掃部頭直澄より献上の大隅肩衝。袋は烏たすき模様の緞子で  
 ある。茶碗は土井大炊頭利重より献上の三島高麗。茶杓は利休作で酒  
 井雅楽頭忠清が献上したものである。花入は土井大炊頭利重が献上し  
 た大そろりである。花は連翹と赤い八重の椿。香合は肩形の螺鈿であ  
 る。

(茶会8)



(茶会8)

同三月廿二日<sup>(31)</sup>

一 瑞竜院様御晦之節御手前<sup>ニ而</sup>御茶被進

御茶入

袋かんとう<sup>(32)</sup>

御茶碗 三嶋はけめ<sup>(33)</sup>

御香合 青貝飛龍

右之外ハ

紀昀様御晦之節之通

(現代語訳)

寛文十年三月廿二日

一 瑞竜院様(尾張光友卿の法号)晦日の節として(將軍の)手前にてお茶を頂いた。茶入の袋は間道。茶碗は三島の刷毛目である。香合は螺鈿で飛龍の文様。これらの他の道具類は二月二十五日の紀州様の晦日の節で使われたものと同じである。

（茶会9）

同年六月三日  
一 永井伊賀守京都御晦之節  
御手前 御茶被下

|     |     |     |     |     |     |       |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|
| 三つ羽 | 御茶合 | 御茶合 | 御茶合 | 御茶合 | 御茶合 | 御茶合   | 御茶合 | 御茶合 | 御茶合 |
| 大とり | 青貝  | 法楽  | 妙門霰 | 小堀  | 瓦庵  | 師匠坊肩衝 | 青磁碗 | 割高麗 | 妙門霰 |

（茶会9）

同年六月三日<sup>34</sup>

一 永井伊賀守京都<sup>江</sup>御晦之節  
御手前<sup>二</sup>御茶被下

|     |                     |
|-----|---------------------|
| 御懸物 | 瓦庵 <sup>35</sup>    |
| 御茶入 | 師匠坊肩衝 <sup>36</sup> |
| 御花入 | 青磁碗                 |
| 御茶碗 | 割高麗 <sup>37</sup>   |
| 御釜  | 妙門霰 <sup>38</sup>   |
| 御茶ヒ | 小堀 <sup>39</sup>    |
| 御水指 | 法楽                  |
| 御香合 | 青貝                  |
| 三つ羽 | 大とり                 |

（現代語訳）

寛文十年六月三日

一 永井伊賀守尚庸（京都所司代）が京都へ戻るとまごいの挨拶の折、（將軍の）手前にてお茶を頂いた。掛物は瓦庵の墨蹟。茶入は四聖坊の肩衝。花入は青磁の砵。茶碗は割り高麗。釜は妙門霰。茶匙は小堀遠州作。水指は焙烙。香合は螺鈿。羽箒は鶴の三つ羽である。



(注)

(茶会4)

(1) この日、寛文六年(一六六六) 午十二月十六日の記録は『嚴有院殿御実紀』に、

酒井雅楽頭忠清はじめ。諸老臣に饗膳をたまひ。その後茶室にめして後。みづから御挿花(山茶。梅)ありて。又御手前の御茶を下さる。

と記述されている。山茶は椿全般を示す言葉で山茶花とは異なる。また、『殿中日記』(国立公文書館蔵)にも、

御老中へ御料理被下候也 於御囲御手前<sup>二</sup>而御茶被下候也

御囲へ出ル御道具

|     |      |      |         |        |
|-----|------|------|---------|--------|
| 御懸物 | 定家七首 | 御花入れ | 長崎ゝ来    | 青地堪(礎) |
| 御花  | 赤椿梅  | 御茶入  | 板倉周防守上ル | 繁雪肩衝   |
| 御茶碗 | 三嶋高麗 | 御茶杓  | 酒井雅楽頭上ル | 利休     |
| 御水指 | 信楽焼  | 御香合  | 松平美作守上ル | 青貝     |
| 御釜  | 掛戸筋  | 三ツ羽  |         | 大鳥     |
| 炭斗  | ふくへ  | 以上   |         |        |

と記載されている。『茶会集』、『嚴有院殿御実紀』、『殿中日記』の三つの記録から、この茶会が何のための会かは判然としないが、老中が招かれて饗されたこと、花手前と茶の手前は將軍家綱が行ったこと、更には道具類の詳細も明らかである。『茶会集』の記述には見られないが、『殿中日記』においては貴重な道具類が誰から献上されたかも記されている。「はじめに」においても述べたが、<sup>6</sup>武田庸二郎氏によれば、「藩主の隠居もしくは死去に伴う代替わりの

際、(中略) 先代愛用の品を將軍に献上することは、家綱政権期当時、一種の武家習慣となっていた。(中略) 献上品に何が適當であるかは、あらかじめ幕府から内々に伝達され、襲封の御礼に登城する際、献上される」と説明されている。この日の茶会では、名物茶器の徳川家への更なる献上を促すために茶会の中で言及されたものか。柳宮茶会の茶会記ならではといえる。この当時の老中は稲葉美濃守正則、久世大和守広之、土井但馬守数直、板倉内膳正重矩である。この時、酒井雅楽頭忠清は大老であったが、この茶会に参加していたかどうかはわからない。

(2) 繁雪肩衝 はんせつかたつき

名物。漢作唐物茶入。繁雪肩衝の名は武野紹鷗の弟子の繁雪という人が所持したことによるという説(林羅山『繁雪肩衝記』)と、雪がしげく降りかかったような景色により、足利義政が命名したという説(徳川家蔵『御道具書画目録』)とがある。『徳川実紀』によれば、繁雪肩衝は繁雪所持の後に徳川幕府の所持品となり、三代將軍家光から京都所司代板倉重宗にあたえられた。板倉重宗は明暦二年(一六五六)十二月一日に没し、翌明暦三年(一六五七)三月二十五日に、長男重郷が父の遺物として左文字の刀、繁雪肩衝、黒塗四方盆を四代將軍家綱に献上した。家綱没後の延宝八年(一六八〇)六月二十七日、家綱の遺物として、館林の徳松(五代將軍綱吉の長男)に自恕思軒江両筆の掛幅と金森正宗の指添と繁雪肩衝が与えられた。徳松はこの前年に生まれ、五歳でこの世を去ったため、繁雪肩衝は綱吉の所持となった。元禄十一年(一六九八)三月十八日、將軍(綱吉)から綱誠(尾張三代藩主)に繁雪肩衝はあたえられ、代わりに綱誠からは將軍に大隈肩衝が献上された。元禄十二年(一六九九)六月五日、綱誠は江戸の市ヶ谷邸で他界し、繁雪肩衝は綱誠から吉通(尾張四代藩主)に伝わった。吉通没後の正徳三年(一七一三)九月十八日、吉通の遺物として、吉通のあと



期王朝以前からあったといわれ、唐で発達した。奈良時代に日本に伝えられ、<sup>10</sup>『下学集』や節用集類には「螺鈿」に「アヲカイ」の訓があてられている。『殿中日記』にはこの螺鈿の香合は松平美作守が献上したと記されているが詳細が分からない。松平美作守宗綱は万治元年九月八日に襲封のお礼として佗助という茶人を献上しているの、この香合の献上はそれ以前かもしれない。

(8) 筋 筋釜 すじがま

茶湯釜の一つ。釜の肩や胴に太い筋目の文様がみられるものの総称。筋目は縦の物も横の物もあるが、天明の釜に多い。天明は天命、天猫とも称したが、産地は下野国佐野、現在の栃木県佐野市で、今も鋳物が生産されている。茶湯釜は、古くは治安三年に鋳たという安三釜などがあるが、蘆屋釜に比べると装飾性が少ない。<sup>11</sup>鈴木友也氏によれば「佗茶の茶人は鉄鋳物膚の錆びた膚に雅味を求め鋳物師を指導した」とある。遺物には東京国立博物館保管の筋釜が知られる。

(茶会5)

(9) この日、寛文十年(一六七〇) 戌十一月十五日の記録は『厳有院殿御実紀』に、

甲館両宰相并井伊掃部頭直澄に御茶給はるべしとて。両卿并掃部頭直澄まうのぼられければ。稲葉美濃守正則。板倉内膳重矩導き。酒井雅樂守忠清出むかひ。御茶室にいらる時に出まし。各拝謁し奉る。釜を上べしと仰ありていらせ給へば。土井能登守利房いで、。爐上の釜を上てかたに置。其時出給ひ。炭をあそばし。いらせ給ふとき。料理たまはるべしと仰あり。この時近習の輩出て。両卿に直澄の前へ饌を供し。各拝食終り菓子を供せらる。時に土屋但馬守敷直出て仰をつたへ。両卿。直澄御

茶室を退き腰懸にまかる。其跡にて御みづから花をあそばさる。次に両卿。直澄のもとへ久世大和守廣之出むかひ。ふた、び御茶室にまいり。御手前の御茶を賜はり。畢て御勝手に参入すべしとの御旨あり。各御勝手手の御座敷にまいれば。御宴ひられ御盃賜はる。程へて入御の後。また菓子。薄茶を給ふ。

と記述されている。また、『殿中日記』にも、

一 甲府館林両宰相殿江 御座之間於御次之間二御料理被進之出新御囲二御手前二而御茶被進之

御囲之御飾也

一 御懸物 虚堂墨蹟 一 御釜 桐 一 御茶碗 井戸  
一 御茶入 筑紫／肩衝 一 御水指 縄簾 一 御茶杓 利休  
一 御花入 蕪なし 一 御香合 堆朱／布袋 一 御三羽 大鳥

御鎖之間

一 御懸物 月之陰 牧谿筆 一 御香合 孔雀 一 御壺 駕籠昇  
一 御釜架 天龍 一 御水入 太鼓胴 一 御釜  
定家歌書 一 御墨硯屏風京物

御次之間 御硯家

御硯箱紙 釣香炉 かねの物 花鳥坊

と記載されている。甲府様は三代將軍徳川家光の三男、徳川綱重。館林様は家光の四男であり、後に五代將軍となった徳川綱吉である。井伊掃部頭直澄についての詳細は判然としないが、<sup>12</sup>白峰句氏によれば、『国士大辞典』『柳宮補任』等の老中の項目に記載はないが、『角川新版日本史辞典』では老中(寛文八年十一月十九日)延宝四年(一月三日)、『岩波日本史辞典』では大老(期間、同上)とさ



れていること、また<sup>13</sup>美和信夫氏によれば「井伊直澄は大老ではなく、幕府の大臣にあずかる元老的地位にあった」こと等の指摘がある。蕪なしという青磁の花入れは（「前報告参照」）は万治三年三月九日に稲葉美濃守正則が献上したものである。

(10) 桐 桐文釜 きりもんがま

胴に桐の花と葉の組み合わせで構成される文様がある。桐の文様は様々あるが、九州国立博物館蔵の「桐紋釜」が一例として参照できる。

(11) 筑紫 筑紫文琳 つくしぶんりん

唐物文琳茶入。ミホミュージアムによれば、元々明時代（14～16世紀）に焼かれた陶製の文琳茶入れである。伝来は津田宗達（江月和尚）龍光院とされ、現在は龍光院が所持している。しかし、寛文十年十一月十五日の家綱の茶会の道具として記録されているのはどういうことか。検討が必要である。

(12) 縄簾 なわすだれ

<sup>14</sup>西村昌也氏は『陶説』の中で縄簾の施紋技術について「竹を施紋する長さに切り、その一部を切り取って断面を馬蹄状にして切り口を尖らせ、これを器胎に押し付けて載せた台をゆっくり回転させる」と縄状のはつり痕が付き、それを日本で縄簾と称した」という。褐色の素地に巡らされた細かい連続模様が、縄で編んだ簾を連想させるのでこの名があるようである。これは、万治三年三月十日、酒井讃岐守忠勝によって茶会の返礼として献上されたものである。

(13) 布袋 ほてい

中国、唐代末の禅僧。藤江正通氏は『角川茶道』の中で「名は契<sup>か</sup>此、号は長汀子<sup>ちやうていし</sup>。四明山に住み、体が肥満して腹が大きく、容貌は福々しく、日用の一切を詰めた大きな袋を担って杖を持ち、市中に喜捨を求めて歩いた」と説明している。日本では七福神の一人として親しまれる。四明山は中国浙江省の寧波<sup>ニンポ</sup>の西方にある霊山。この

布袋の香合は中国漆器を代表する技法とされる彫漆の一種、堆朱である。この堆朱布袋の香合は、この茶会の当日に堀田備中守正俊が献上したものである。

(14) 八景 瀟湘八景図 しょうしょうはつけいず

「八景御懸物牧溪筆」とあるので、牧谿筆の瀟湘八景図を示すと考えられる。河合正朝氏は『角川茶道』の中で、「將軍家の収蔵目録である『御物御画目録』には、牧谿・芳汝・夏珪・玉潤らの八景図のことが著録されている。中でも牧谿や玉潤のそれは、近世の茶湯者たちにことに珍重され、『山上宗二記』のほか、『天王寺屋会記』『宗湛日記』などの茶会記にもその名を見ることができると説明している。

(茶会6)

(15) この日、寛文十年九月朔日の記録は『嚴有院殿御実紀』に

水戸宰相光圀卿就封の辭見せらる。黒木書院の茶室にて御手前の御茶たまはり。はて、宴ひらかれ。鷹三据つかはさる。家司も皆拝し奉る。

と記述されている。また、『殿中日記』にも

一水戸宰相殿明日之為御礼御登城出御座之間二浅目へ出西胡之間二而御料理出於御囲二御手前二而御茶被進之御鷹三居御拝領之

御囲之御飭物

一御懸物 卯月郷 一御茶入 朱衣 一御茶碗 はけめ  
一御茶杓 利休 一御釜 大あられ 一御水指 法楽  
一御香合 青貝屈輪 一御花入 大そろり 一御花

かきつはた 三羽 大鳥

と記載されている。

(16) 御晦 御晦之節

この茶会6では水戸光圀卿が、茶会7では紀州様が、茶会8では尾張光友卿が、茶会9では永井伊賀守が御晦日の節として家綱から手前のお茶を賜っている。『厳有院殿御実紀』によれば、この日、光圀卿は「就封の辭見せらる」ために登城した。この前日、すなわち8月晦日条には「水邸に稲葉美濃守正則御使して。就封の暇仰つかわさる」との記述がある。茶会7、8、9については後述するが、この「御晦」「御晦之節」というのは毎月の晦日をさすわけではなく「辞見」の事と思われる。『日国Ⅱ』では「辞見」は「使者が出発、帰国などの際、別辞を述べるため目上の人と対面すること。お目見え。いとま乞い」と説明されている。参勤交代で国元に帰ることを許されたための暇乞いの挨拶と考えられる。

(17) 卯月郷 うづきのさと

卯月は旧暦では初夏、卯の花(白い卯木の花)の咲く頃に例えて卯月と付けられたとされる。この茶会は十一月十五日に開かれているので季節が合わない。卯の花はおからを指す言葉でもあるが、おからは別に雪花菜きらずという名も与えられている。白くて切らずに食べられるということを意味するようである。『日国Ⅱ』によれば雪花菜にはおからの他に「雪、または雪降りをいう」とも示されている。寒い冬に少し雪が降りつもった木々の様子を暖かい初夏の白い卯木の花の咲く様子に見立てたのか。詳細は不明である。

(18) 肩衝 朱衣 かたつき あけのころも

朱衣の肩衝は漢作唐物茶入で大名物である。小田栄一氏は『角川茶道』の中で、漢作は「茶入の分類名称。中国産茶入のうち、年代古く上作な類をいい、単なる唐物と分けている。いずれも古来重宝さ

れ大名物に属している」と説明している。もとは武野紹鷗が所持していたが、後に徳川家康所持となり、これが紀州家に伝わったが、寛文七年(一六六七)六月朔日、紀伊宰相光貞卿就封を謝して、隠居した父・大納言頼宣卿より虚堂墨跡等と共に朱衣肩衝茶入が家綱に献上された。この茶会は寛文十年であるので、朱衣肩衝はこの時、徳川將軍家にあつた。その後、<sup>15</sup>嘉永三年(一八五〇)十二月(三日と伝わる)に島津齊興なりあきに下賜されるが、昭和三年、島津侯爵家の売立で売却され、後の消息は不明である。

(19) 大あられ 霰釜 あられがま

釜の表面に霰(粒々の突起)を配した茶湯釜。『新版茶道』によれば「霰の中に丸窓を作り、花卉などの図様を入れたり、霰地紋の上に野鳥・短冊形を散らすことがある。芦屋釜では総体に霰は小粒でまろやかであり、天命釜においては大粒で先が尖る」と説明されている。

(20) 法楽 ほうらく ほうろく 焙烙 炮烙

法楽は焙烙、炮烙のことと思われる。高橋尚子氏は『角川茶道』の中で「元来は素焼の平たい土鍋の名称で、多くは穀物や豆などを炒る農具を、茶器として現在でいう灰器に見立てた」とされる。この茶会では水指として使われている。

(21) 大そろり 大曾呂利

曾呂利は花入の形状であるが、座露吏ぞろりとも書く。胡銅製で首の部分が細長く無文である。部分的に文を見るものもある。花を生ける他に、柄杓立としても用いる。四方盆に据える。大曾呂利は曾呂利の花入より大ぶりのものをいう。この茶会で用いられた大曾呂利には飛龍の文様があつたようである。この茶会で用いられた大そろりの花入は、寛文五年七月一日に土井大炊頭利重が献上したものとと思われる。

## (22) ぐり 屈輪 俱利

『日国Ⅱ』によれば、屈輪は「漆塗の堆朱や堆黒で用いられる、蕨形の連続した渦巻文様。また、それを彫り出したもの。禪宗寺院建築や工芸品にみられる。ぐりぐり。ぐりん」と説明されている。<sup>16</sup> 曲輪とも表記される。

## (23) 大鳥 おおとり

三つ羽（三枚羽の羽箒）に大鳥の羽を用いたもの。大鳥は鶴（鶴）である。鶴の三枚羽は利休が使い始めたとして『長闇堂記』<sup>18</sup>『源流茶話』に記述されている。

## (茶会7)

## (24) この日、寛文十年二月二十五日の記録は『嚴有院殿御実紀』に

大納言頼宣卿辭見せらる。御宴ひらかせられ御盃賜ひ。馬一匹。鷹三連つかはされ。また御茶室にとみなひたまひ。御手前の御茶を賜ふ。家司どもみな拝し奉る。

と記述されている。また、『殿中日記』にも

紀伊大納言殿江御黒書院出西胡之間ニ御料理被進之以後於御囲ニ御手前ニ而御茶被進之其以後出御座之間御尊顔御鷹三居御馬壺正拝領之

## 御囲之御道具

一御懸物 圓悟 一御釜 相竹中 一御水指 法楽新土  
一御茶入 大隈肩衝／袋鳥たすき綴子 一御茶碗 高麗／  
三嶋／ハケ目 一御茶杓 利休作 一御花入 大そろり  
一御香合 青螺肩衝 御花 連翹／赤八重椿  
一三羽 野鷹

と記載されている。この日も『茶会集』の記述では「紀州様御晦之節」と記載されているが、『嚴有院殿御実紀』では「大納言頼宣卿辭見せらる」とされ、二月二十三日条の記述には「この日土屋但馬守數直御使して。紀伊大納言頼宣卿のもとに帰国の暇仰つかはさる」とある。紀伊大納言頼宣卿が参勤交代で国元に戻ることを許されたので、登城して暇乞いの挨拶をしたものであろう。

## (25) 圓悟 圓悟克勤 えんごくこん

芳賀幸四郎氏は『角川茶道』の中で、圓悟克勤（一〇六三—一二三五年）は「宋代の臨済宗の僧。字は無著。したがって無著克勤とよぶべきであるが、北宋の徽宗帝から仏果禪師、南宋の高宗帝から圓悟禪師の号をおくられたので、一般に圓悟克勤と称されている。（中略）圓悟の墨蹟は、彼の禪宗史上における重要さもあつて古来珍重され、ことに茶人の中で重んぜられた。茶室に墨蹟を掛けるようになったのは、村田珠光が一休宗純からもらい受けた圓悟の墨蹟を掛けたのが最初だといわれ、この伝承に基づいて圓悟の墨蹟は『開山墨蹟』とも称された。現在伝存しているものには『流れ圓悟』の名で知られる東京国立博物館蔵の一幅（国宝）と、畠山記念館蔵の一幅（重文）とがある」。この日、掛けられた圓悟の墨蹟は寛文六年七月二八日に蜂須賀千代丸（綱通）が献上したものである。

## (26) 竹中

竹の自在鉤のことか。『殿中日記』には「相竹中」と記載されており、中ぶりの竹で作られた自在鉤を桐の釜と合わせたものか。茶会8では詳細な道具類は示されていないが、記録の最後に「右之外ハ紀易様御晦之節之通」と記されている。これは茶会7の事であり、この時に用いられた釜が茶会8で再度使われていることが分かる。その釜について、茶会8の『殿中日記』の記録には「一御釜 相三



鼓」と記載されているので、横木（子猿）の部分に三鼓の装飾がなされている自在鉤を茶会8では桐の釜に合わせて用いたという事であろうか。現在の規格では自在鉤の小は鉤棒の長さが60〜70センチ、中は100〜110センチ、大はそれ以上のものである。

(27) 法楽新

新しい土で焼かれた焙烙の水指。『殿中日記』にも「法楽新土」とみえる。

(28) 大隅肩衝 おおすみかたつき

漢作唐物茶入で大名物である。本多大隅守忠純が所持していたため本多大隅肩衝とも呼ばれる。寛永八年十二月十三日に忠純が没した後、娘婿の政逐が遺領を継いだ、寛永十五年七月二十九日に他界。その後も嗣子に恵まれず、寛永十七年に同家は断絶した。大隅肩衝もこの時、幕府の所持となった。大隅肩衝はその後、井伊掃部頭直孝に伝わり、万治二年（一六五九）直孝の没後七月二十六日に井伊玄蕃頭直澄から父の遺物として家綱に献上された。延宝六年（一六七八）二月二十六日に家綱はこの肩衝を尾張徳川家に与えたが、元禄十一年（一六九八）三月十八日、尾張家より繁雪肩衝の見返りとして綱吉（五代将軍）に献上された。綱吉没後の宝永六年（一七〇九）二月三十日に綱吉の遺物が分配されたが、この時、大隅肩衝は紀伊の徳川吉宗に与えられ、その後紀伊家に伝わった。昭和二年（一九二七）、紀伊家の売り立てにより売却され、その後の消息は不明である。この茶会は寛文十年であるので、この時、大隅肩衝は家綱のもとにあった。

(29) 鳥たすき 鳥襷 とりだすき

小笠原小枝氏は『角川茶道』の中で、「鳥の文様が襷形に構成された文様。染色文様としても古く、正倉院裂に藤頼とうけちによるこの種の文様がみられる。しかし形式的に最も整ったのは有職文様において、唐花の十字形を中央に二羽の鳥を四方に配した田文を輪違に組

み合わせた鳥襷文などは数多い有職文様の中でも特に優れたものといえる」と解説している。

(30) 青螺肩形 せいらかたがた

日国Ⅱによれば、青螺とは「青い螺貝なめし。青いほら貝」のこと。螺鈿である。肩形の香合がどのような形のものであったかの詳細は不明。

(茶会8)

(31) この日、寛文十年三月二十二日の記録は『厳有院殿御実紀』に

黄門光友卿辭見せらる。御宴設られ。其上御茶室にて御茶賜ひ。かさねて鷹馬つかはされ。家司同じく拝し奉る。

と記述されている。また、『殿中日記』にも

一尾張殿江昨日以上使御暇被進候為御禮御登城出御料理出於御  
囲二御手前二而御茶被進之其後御座之間二御鷹三居御馬一疋  
御拝領過之（中略）

御茶の御道具御飾り

一御懸物 圓悟墨蹟 一御茶入 大隈肩衝 一御花入 大そろ  
り 一御茶碗 三嶋はけめ 一御茶杓 利休作 一御水指  
法楽 一御釜 相三鼓 一御香合 青貝飛龍

と記載されている。

この日も『茶会集』の記録では「瑞竜院様御晦之節」と記載されているが、『厳有院殿御実紀』では「黄門光友卿辭見せらる」とされ、三月二一日条には「尾張黄門光友卿のもとに稲葉美濃守正利御使して。就封のいとま給ふ」とある。また、『茶会集』では光友卿のこ

とを瑞竜院様としているが、瑞竜院は光友卿の法号である。この時点で、光友卿は生存しており、『茶会集』が茶会記としてまとめられたのは後年であることが分かる（『茶会集』の評釈（一）では協和二年以降と推定）。

（32） かんとう 問道 かんどう

<sup>19</sup> 西村兵部氏によれば「問道といわれるものには広義には縞織物であるが、狭義には十五、十六世紀に輸入された絹および木綿の縞、格子、緋のものをいう。漢東・漢島・広東などの字も使われ、（中略）特に茶道の興隆とともに茶入袋によるこぼれ、名物裂にはその数約四十種をかぞえる。なかでも鎌倉・望月・丹越・弥三右衛門などは古渡りとされ、有名である。問道は大略次のように分類される。（一）縦縞のもの（鎌倉・海老殻など）、（二）真田紐が横に入ったもの（丹越・高木など）、（三）太細の縦縞に太い横縞のもの（高木）、（四）細かい格子模様のもの（利休）、（五）縦縞と格子のまじるもの（青木・望月・丹越）、（六）横縞でよろけた感じのもの（日野）、（七）縦縞に横筋のあるもの（しじら）などである。その生産地はインドを主とし、それに東南アジアおよび中国南部のものがまじり、オランダ船や朱印船によってもたらされたものが多い。十八世紀以降、わが国内に木綿生産が各地でおこると、輸入の縞織物に模したものがつくられたが、十五、六世紀の問道類ほどの気品のあるものは生まれなかった」と解説されている。問道は一五四八年に成立した<sup>20</sup>『運歩色葉集』には「漢陽 カンタウ」と記載されている。

（33） 三嶋はけめ 三島はけめ みしまはけめ

高麗茶碗の一種で、刷毛目三島、三島刷毛目とも呼ばれる。

<sup>21</sup> 谷晃氏は「高麗茶碗つれづればなし 三島／割高台」の中で「三島といえは「ああ、花模様のある茶碗」とすぐさま思い浮かべるこ

もつとも早く現れます。（中略）なぜ三島と呼ばれるようになったのでしょうか。それは茶碗に付けられた文様が、現在の静岡県三島市にある三嶋大社が古くから発行している「三島暦」を連想させることからいわれています」と説明している。刷毛目三島は朝鮮、李朝時代の茶碗や鉢の内外に型押し細かな花紋や天紋等の三島文様を施し、その上を白泥ないし黒泥で刷いたものである。三島刷毛目茶碗は寛文五年七月一日、土井大炊守利重が献上している。

（茶会9）

（34） この日、寛文十年六月三日の記録は『嚴有院殿御実紀』に

京職永井伊賀守尚庸上洛の暇給ふとて饗賜ひ。御茶室にて御手前の御茶下され。金。時服并に駿馬一匹引せられ。其上侍従に任ぜらるゝ旨命ぜらる。

と記述されている。また、『殿中日記』にも

一 永井伊賀守今日御暇可被下御茶旨被仰出然間御料理被下之席  
琴茶書晝間給仕小納戸衆勤之土井能登守堀田備中守板倉筑後  
守松平民部少輔松平因幡守出座合挨拶事過御表江退座  
一 御座之後御囲江午之刻出御此節伊賀守被召出候  
御手自被下御茶久世大和守伺公（候）ご挨拶申上之

御囲御道具飾

一 御懸物 元庵墨蹟 一 御花入 青磁礮 一 御香合 青貝  
一 御釜 妙門霰 一 御水指 法楽 一 御茶入 師匠坊  
一 御茶碗 割高臺 一 御茶杓 小堀作  
一 御花 玉菖蒲 ご自身被遊之 一三羽 大鳥

と記載されている。

この日も『茶会集』の記録では「永井伊賀守京都江御晦之節」と記載されているが、『厳有院殿御実紀』では「京職永井伊賀守尚庸上洛の暇給ふ」と記載されている。京都所司代である永井尚庸は、江戸での仕事を終えて京都に帰る挨拶のために登城したものである。

(35) 元庵 ゴツアン ごったん

宋の僧。名は普寧。生没年は一一九七～一二七六年。臨安の中国五山第一位の径山寺で無準師範に参じ、その法を嗣ぐ。文応元年（一二六〇）、蘭溪道隆や円爾らの招きを受けて我が国に来朝。北条時頼に招かれて建長寺第二世となる。時頼の死後の文永二年（一二六五）に在留僅か六年で帰国し、至元十三年（一二七六）十一月二十四日、温州江心山龍翔寺に入寂す。日中両国に語録と書跡が残る。著作に『元庵和尚語録』一卷がある。勅諡は宗覚禪師。臨済宗元庵派の祖。至元十三年は中国年号。日本では建治二年。元庵筆掛幅は明暦三年三月一日、鍋島信濃守勝茂によって献上されている。

(36) 師匠坊肩衝 四聖坊肩衝 ししょうぼうかたつき

大名物の唐物肩衝茶入で、南都（奈良）東大寺山内花嚴宗本寺四聖坊に伝来した什物であったところからこの名がある。師匠坊肩衝とも称される。<sup>22</sup>芳賀幸四郎氏によれば「名器として珍重されたが、徳川家康の手に移り、以後山内一豊・忠義、徳川秀忠、藤堂高虎・高次、徳川家光、酒井忠勝、徳川家綱、徳川光貞、徳川綱吉、前田綱紀と転伝し、現在、前田家に伝存している。高さ約八・四センチの端正な肩衝で、釉薬も穏やかで見事である」とされる。この師匠坊肩衝は万治二年九月五日に酒井讃岐守忠勝によって献上されており、この茶会のあった時、寛文十年六月三日には家綱のもとにあったことが分かる。

(37) 割高麗 わりこうらい

割高台のことと思われる。『殿中日記』には「割高臺」とみえる。

割高臺は高麗茶碗であるが、高台に十文字、或いは数か所の切り込みを入れた、作爲の強い作品である。<sup>21</sup>谷晃氏は「高麗茶碗つればなし 三島／割高台」のなかで「割高台の名称は、高台が割れている茶碗ではなく、高台に切り込みを入れたものをいいます。ただし切込みにはいろいろなものがあり、高台の一部を小さく切り落としたもの、大きな切込みを数ヶ所に入れたもの、あるいは高台の内部を削り込まずに平たいまま十文字の切り込みを入れたもの、はては切り取った残りの部分が三本足のようになってしまうものなどさまざまです」と説明している。この茶会で用いられた割高台はもとは福島正則が所持したと伝えられ、のちに土井大炊守利勝のものとなり徳川家に献上されたものか。『東武実録』によれば寛永五年（一六二八）正月一八日条の西の丸で興された御会の<sup>23</sup>記録には「高麗割高台 土井利勝献上ス」とある。

(38) 妙門霰 みようもんあられ

名物釜。万治三年（一六六〇）に成立したとされる『玩貨名物記』（国会図書館蔵）の「御釜」の項目には九つの釜の名が挙げられているが、その中に「一 めうもんあられ ふる釜」と名が挙げられている。この茶会は寛文十年（一六七〇）六月三日に執り行われているが、この時妙門霰釜は家綱の所持であったことが分かる。

(39) 小堀 小堀遠州

江戸時代前期の大名であり、茶人。遠州流の祖である。<sup>24</sup>熊倉功夫氏は、小堀遠州は「天正七年（一五七九）近江国坂田軍小堀村（滋賀県長浜市小堀村）に生まれる。父は小堀新介正次、母は磯野丹波守貞正の女。幼名作介、名は政一（正一とも記す）。慶長十三年（一六〇八）従五位下遠江守に叙せられ遠州と呼ばれた。（中略）慶長十一年陽成院御所の作事奉行を命ぜられて以来、駿府城・禁裏・二条城・仙洞御所等々多くの作事奉行を歴任。建築・造園にすぐれ



た才能をあらわした。（中略）元和九年（一六二三）十二月伏見奉行になる。正保四年（一六四七）二月六日伏見奉行屋敷にて没した。享年六十九歳。京都大徳寺弧蓬庵に葬る。室は藤堂高虎養女。茶人としての遠州は幼いころより父新介について茶に親しみ、十八歳の時露地手水の水遣りに工夫をこらし茶の師古田織部を驚かせたといひ、慶長十一年ごろ遠州が茶湯の質問を織部にした記録『慶長御尋書』が残る。一方十代より大徳寺春屋宗園について禅を修行し、同十四年大徳寺の道号をうけ、春屋からさらに寿像（弧蓬庵蔵）に賛を得た。このころには作事を通じて宮廷文化との接触も深まり、また久保長闇堂など茶人との交流も広まって、遠州の茶風が次第に完成されると同時に茶人としての地位も確立してくる。ことに古田織部なきあとは大名茶の総帥として多くの大名茶人を指導した」と解説している。この小堀遠州作の茶杓（匕）は寛文五年一月一日に小堀備中守正之によって献上されている。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、資料収集にご協力いただきました名古屋市蓬左文庫の皆様、また翻刻を行うにあたりご指導を頂きました社会専修・中村修也先生に深謝いたします。

## 参考文献

1. 石井智恵美「『茶会集』の評釈（一）——寛永年間の御成の茶会——」『文教大学教育学部紀要』第五二集 三〇六～三三〇頁、二〇一八年
2. 石井智恵美「『茶会集』の評釈（二）——正保元年の山里茶会——」『文教大学教育学部紀要』第五三集 二七六～二九八頁、二〇一九年
3. 『徳川実紀』『新訂増補国史大系』吉川弘文館、一九六四（一）

一九六六年

4. 池ノ谷匡祐「数寄屋御成の展開と衰退」『史観』第一七三冊 一～二七頁、早稲田大学史学会編、二〇一五年
5. 「厳有院殿御実紀」『徳川実紀』第四篇・第五篇『新訂増補国史大系』四一・四二、吉川弘文館、一九六五年
6. 武田庸二郎「徳川家綱の茶湯について——身分制社会における饗応と贈答——」『幕藩制社会の地域的展開』村上直編 雄山閣、四九三～五二八頁、一九九六年
7. 伊藤慎雄・小山富士夫「三島——高麗茶碗の窯址（三）——」『茶碗』第二〇巻 第二号 宝雲社 四十九～五十四頁、一九五〇年
8. 林屋晴三「数寄道具の変遷 唐物数寄から佗び数寄へ」、『茶道聚錦十』小学館、六一～六八頁、一九八六年
9. 寺嶋良安『和漢三才図絵』吉川弘文館 四二九頁、一九〇六年
10. 近世文学史研究の会編『増補下学集下巻』文化書房 三九六頁、一九六八年
11. 鈴木友也『国史大事典』九巻 吉川弘文館 一〇二九頁、一九八八年
12. 白峰旬「老中就任者についての基礎的考察」『別府大学紀要』第四十八号、六十五～九十八頁、二〇〇七年
13. 美和信夫『江戸幕府職制の基礎的研究』広池学園出版部 一〇五頁、一九九一年
14. 西村昌也「近年のヴェトナム陶磁研究——考古学からの新展開」『陶説』第五七七号 二〇～二九頁、二〇〇一年
15. 鹿兒島市役所『島津業彬公伝』鹿兒島教育会 一五頁、一九三五年
16. 近世文学史研究の会編『増補下学集下巻』文化書房 三九三頁、一九六八年
17. 佐藤小吉・佐藤虎雄校注『長闇堂記』、『茶道古典全集』第三巻淡

- 交社、三六四頁、一九七七年
18. 『源流茶話』、『茶道古典全集』第三卷 淡交社、四一五頁、一九七七年
19. 西村兵部『国史大事典』三卷 吉川弘文館、八八四頁、一九八三年
20. 『運歩色葉集』 白帝社（静嘉堂文庫藏本一五四八年成立）一二〇頁、一九六一年
21. 谷晃「高麗茶碗つれづればなし 三島／割高台」『淡交』第六十六卷二号 四六～五三頁、二〇一二年
22. 芳賀幸四郎『国史大辞典』六卷 吉川弘文館、七八二頁、一九八五年
23. 『東武実録（二）』、『内閣文庫所蔵史籍叢刊2』汲古書院、四六一頁、一九八一年
24. 熊倉功夫『国師大事典』五卷 吉川弘文館、九八四～九八五頁、一九八五年